

支局長
からの手紙

14日、2人の看護師が成田からチリへ向かいました。千葉県在住の石岡末和さんと東京都在住の大和玲子さん。岡山市に本部を持つ国際医療援助団体「AMDA」からチリ大地震被災地への第2次チームとして向かったのです。AMDAからはチリで5人、1月に大地震が起きたハイチでは29人が支援に当たることになりました。



2人とも青年海外協力隊員の経験があります。石岡さんはドミニカ共和国に07年6月から2年間派遣され、大和さんも08年1月から今年1月までの2年間、チリで活動。今回の被災地のありさまに「自分でできることがあれば」と手を上げました。「チリで役に立つことがあれば」と大和さんがメールでAMDAに申し出てきたのは今月5日未明。大急ぎで決まった派遣ですが、大和さんは「チリの人たちに恩返しができるよう頑張ります」と事務局に伝えて旅立って行きました。

2月27日のマグニチュード(M)8・8の大地震に続き、チリでは今も大きな余震が被災地を襲っています。今日11日のピネラ新大統領の就任式直前にもM6・9と6・7の余震が相次いで起きました。国会議事堂での就任式に列席した南米各国の首脳も「びっくりした」「慣れないので驚いた」と話す一方で、ペルーのガルシア大統領が「チリ国民と地震の体験を共有で

きて光栄だ」と余裕を見せたという報道もありました。既に第1次チームとしてAMDAから派遣されている調整員、森田佳奈子さん(大阪市)も被災地・タルカでこの余震に出会い、AMDAへの報告によると、

大統領就任に伴う県庁での人事異動セレモニーの前に大きな揺れがあり、「恐怖のあまり涙を流すもの、ショックで気が遠くなるもの。手の震えが止まらず安定剤をのむ人々の中で、まずは自分の安全確認に努めた」ということでした。

余震の街へ

阪神大震災から15年。その間、AMDAが経験から改めて学んだことは何か。菅茂代表は①誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある②困ったときはお互いさまという「相互扶助」の精神③まさかの時に助けるのが真の友——の三つを挙げます。「砂場に磁石を入れると砂鉄が吸い上げられるように、チャンスがあれば命のために多くの気持ちが集まります。AMDAもチャンスをもたらてるんです」。今も余震が続く現場への思いです。

森田さんは「パニックになる人々と身を寄せ合い、余震が去るのを待つ」と伝えていきます。現地では政府が水や食料を配布しているものの、ミルクやおむつ、衣料などが足りないといわれています。派遣メンバーはAMDAボランティア支部員が紹介してくれたタ

ルカの民家を宿舎に、現地の当局者、医療従事者や福祉団体などと協議を重ねながら支援を続けます。写真AMDA提供。石岡さんは当面、乳幼児らの検診や栄養指導に当たります。

AMDAは郵便振替0125012140709、口座名「特定非営利活動法人アムダ」(通信欄に「チリ地震」「ハイチ地震」と記入)で募金中です。

【岡山支局長・松倉展人】